

	方剂名	効能	生薬組成
	書籍	主治および証	病機 方意
治風剂 疏散外風剂 2			
	<p>しょうぞくめいとう 小続命湯</p>	<p>温経通陽・扶正祛風</p>	<p>麻黄・防己・人参・黄芩・肉桂・甘草・白芍・川芎・杏仁各6g・附子3g・防風9g・生姜15g 附子を先煎し、他薬を入れて煎じ、分3で温服する。</p>
	<p>千金方</p>	<p><主治> 風邪中経、正気不守 顔面神経まひ、筋肉のひきつり、半身不随、発語障害、甚だしければ意識もうろうなどを呈す。</p> <p><病機> 風寒の邪が経絡に侵入して気血が痺阻された状態である。 正気不足（気血虚弱）に乗じて風寒の邪が侵入し、経絡、気血を痺阻、凝滞したために、顔面神経麻痺、半身不随が生じる。寒邪は吸引するので、筋脈が拘攣して筋肉のひきつり、舌のこわばり、発語障害が現われる。邪の侵襲が急激で陽気の損傷が強くと、心腎の陽気を内守できないと、意識もうろう、あるいは消失を伴う。</p> <p><方意> 辛温薬で温経通陽、祛風すると共に、正虚に対して扶正する必要がある。 辛温の麻黄・防風・生姜は風寒を外散し、辛温の川芎および辛熱の附子・肉桂は温経散寒に働いて経絡の凝滞を通利し、祛風通絡、止痛、通腠理の防己、および宣肺開泄の杏仁は祛邪を助ける。人参、甘草・附子・肉桂は益気助陽に、白芍・川芎は補血に働き、正気を扶助して祛邪を補佐する。苦寒の黄芩および防己の配合は、風寒外壅で裏気が鬱して化熱するのを防止すると共に、他薬の温熱を抑制する反佐の目的である。</p> <p><参考> <保命集>では肉桂の代りに桂枝を用いている。肉桂は温腎助陽に、桂枝は散寒に働くので、状態によっては適宜用いればよい。 <千金方>には杏仁に代えて白朮を用いた小続命湯があり、「中風冒昧し痛むところを知らず、拘急し転側するを得ず、四肢は緩急し、遺失するなり」と解説している。 本方（小続命湯）は風寒湿痺にも有効である。 肝風内動による運動麻痺に用いると、辛燥により生命の危険を招くので禁忌である。</p>	